

# 立山町利田横枕遺跡 予備調査報告書

— 立山の文化第22号 —

昭和46年10月

立山町教育委員会

立山町文化財保護調査委員会

==== も く じ ====

1. 遺跡の発見と調査までの経緯	276 頁
2. 調査作業の概要	276
(1) 作業の経過	
(2) 調査域についての記録	
3. 遺跡の環境	278
4. 遺物の包含状況および遺構	278
(1) 調査域の土質層序	
(2) 遺物の包含状況や遺構について	
5. 出土品，遺物	283
(1) 石および石製品	
(2) 土器類 須恵器類(第1類～第8類) 土師器類(第1類～第7類)	
(3) 木片および木製品	
(4) 種子類	
○ 図 版	
・第1図：遺跡近辺地形図	277
・第2図：調査域の平面図，断面図	279
・第3図：調査域の断面図(続)	280
・第4図：出土須恵器類	289
・第5図：出土土師器類(1)	290
・第6図：出土土師器類(2)	291
・第7図：藤田氏収集土器類より	292
・第8図：植物質の出土品および石器	293
○ 写 真	
6. 考 察	296
(1) 土器に見られる特徴，年代などについて	
(2) 遺構について	
(3) 関連上考慮を要する歴史的記録について	
○ 参考文献および追記	298

## 1. 遺跡の発見と調査までの経緯

立山町では県営圃場整備事業が推進されているが、昭和45年(1970)西部地区利田第6工区に含まれる曾我東方の八幡川用排水路工事現場から、多数の土器片と遺構を形成していたと思われる列石が出土した。土器片は、当時工事の立会をなさっていた曾我藤田武信氏によって収集保管され、町史編さん室の注目するところとなった。遺構は工事進行の過程で一部は破壊されたが、用排水路の右岸に設けられた農道の下などに残存する部分のあることが、昭和46年1月町文化財保護調査委員会の視察の際にも露頭などによって確認された。

この遺跡は出土する土器類が平安時代のものであるので、同時代の資料に乏しい当町の古代史解明に貴重な手がかりを提供してくれるものであり、ひいては県下・北陸各地の類似品との比較、編年資料として極めて価値のあるものと考えられる。

近辺の整備作業の完了を間近にして、農道も完工段階を迎えたが、以後では調査に各種の困難を伴ってくるのが予想されたので、町文化財保護調査委員会では農道下の部分を緊急に予備調査することにした。

## 2. 調査作業の概要

### (1) 作業の経過

- 昭和46年1月14日 現地視察
- 3月26日～28日 現地における調査作業
  - ・ 3月26日 調査域の決定  
表層土の除去(第Ⅰ層盛土部分の除去はブルドーザーによる)  
水平区画(2m平方に)を設定して杭打ち。  
各区画内の表層土(第Ⅲa層の部分まで)をさらに除去。
  - ・ 3月27日 発掘調査。9区画をそれぞれ分担して発掘。遺物や遺構の出現状況を記録。
  - ・ 3月28日 補正調査。  
遺物の収納。

### (2) 調査域についての記録(第1図～第3図参照)

- ア. 排水路右岸の路肩露頭を手がかりとして、遺物包含地点が中心的に含まれ、3日間で作業が完了し得る程度に調査域を設けることにした。
- イ. 八幡川用排水路右側コンクリート壁の内面より東へ210cm、道路下に埋設されている排水用ヒューム管(径25cm)の中心より南へ40cmの地点に基準杭を打っ

- た。
- ウ. 基準杭より南へ用水壁に並行に6m, 東へ用水壁に直角に4mをとり, それによってできる長方形の区画内を調査域とした。
- エ. 調査域内を2m間隔に区切り, 2m平方の小区画を設けて名称をつけた。南北方向に北から1・2・3, 東西方向に西からA・Bとした。
- オ. なお, A区画の西端から用水壁までの間で, まだ包含層の残っている部分はWとして調査域に含めた。その結果, 調査域は9小区画となった。
- カ. 調査域の南東(3B)の隅は, 東側の新しい水田の南西端にある赤杭から9m 55cmの地点である。

第1図 遺跡近辺地形図 1:3000 (立山西部地区圃場整備事業利田第6工区)  
現況計画平面図をもとにして作図



キ。調査の進行に伴って、垂直基準線を設定して記録の便に備えたが、その高さは東側の新しい水田の表土面より約 15 cm 低い。

### 3. 遺跡の環境（第1図参照）

この遺跡は立山町利田横枕 118-2 番地にある。したがって遺跡の名称を「利田横枕遺跡」とする。

「県営圃場整備事業立山西部地区現況計画平面図利田第6工区」（以下「圃場整備平面図」と略称する）図上の旧水田 118-6 にあたり、曾我東方、県道道源寺水橋線の東方 300 m、現常願寺川河心より東 2 Km、標高 24.5 m の地点に位置している。

この辺りは常願寺川扇状地の末端にあたり、土地勾配も  $1/69$  から  $1/117$  に変化し（註①）以下下流にわたって自然湧泉地帯に移行し、土地の微地形的变化も見られる。常願寺川はらん原形成期にはある程度開析の進んだ自然流路の一つがこの遺跡のすぐ東方にあったことが圃場整備平面図をもとにして作製した地形図（第1図）から容易に推察される。

南方の利田地内や東方の五郎丸・日水地内などからは縄文時代後晩期の土器片や、平安時代以降各期の土器片、板碑型石碑などの出土が見られる。北方約 1.5 Km の塚越八幡社の社域は古墳と推定され（註②）、東方約 2 Km にある稚児塚近辺には奈良時代の東大寺領大藪庄の存在したことが推定されている。（註2）

### 4. 遺物の包含状況及び遺構（第2図、第3図参照）（写真1）

#### (1) 調査域の土質層序

調査域の土質はつぎの5層に大別してとらえることができる。

#### ○第Ⅰ層：礫まじりの砂土（第2図③）

道路中央部で約 80 cm の被覆。極めて淘汰の悪いもので道路造成の際の搬入物。

#### ○第Ⅱ層：砂土（第2図③）

部分的に存在し厚さ約 10 cm、旧水田の表土（耕土）の残ったものと思われる。

#### ○第Ⅲ層：黒ボク土（第2図、第3図の各図）

雲母片が目立つ黒色壤土で厚さは 50～80 cm、漸移的ではあるが上部と下部では粒の大きさがちがうので、さらに二分する。

#### ・Ⅲa 層（上部）

微粒（シルト）質で、褐色に腐食した植物根が多く縦にはいつている。

第2図

調査地の平面図及び南端、北端断面図

1:50 0 100 cm

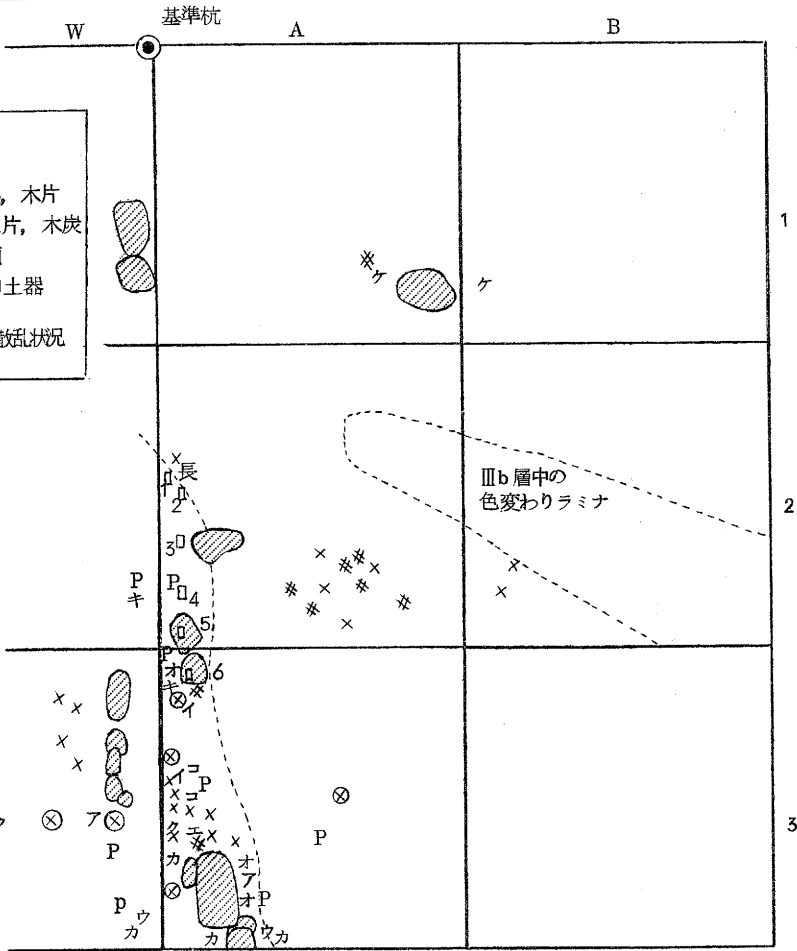
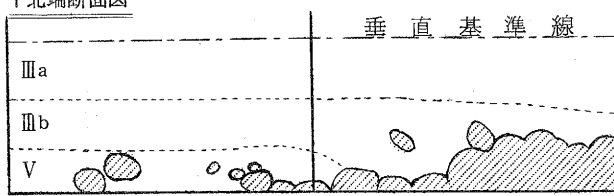


② 平面図

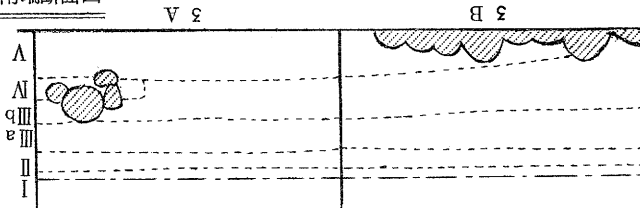
排水路コンクリート

- : 石
- : 木杭
- : 木製品, 木片
- : 焼痕木片, 木炭
- : 種子類
- : 四点印土器
- ア
- コ
- : 土器片散乱状況

① 1北端断面図



③ 3南端断面図

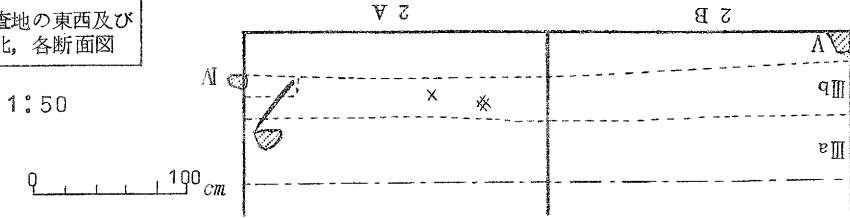


- I: 道路盛土
- II: 旧水田の表土
- IIIa: 黒ボク, 細粒層
- IIIb: 黒ボク, 砂層(準包含層)
- IV: 砂層, 含細礫(包含層)
- V: 黄砂及び礫層

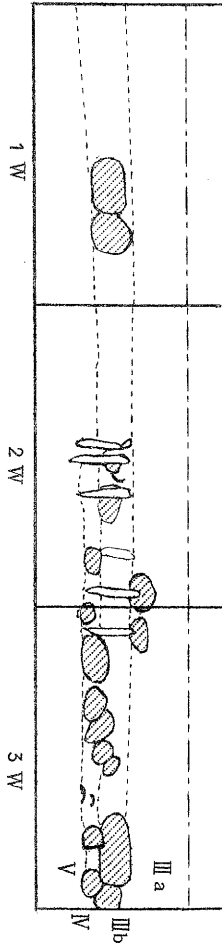
第3図

調査地の東西及び南北、各断面図

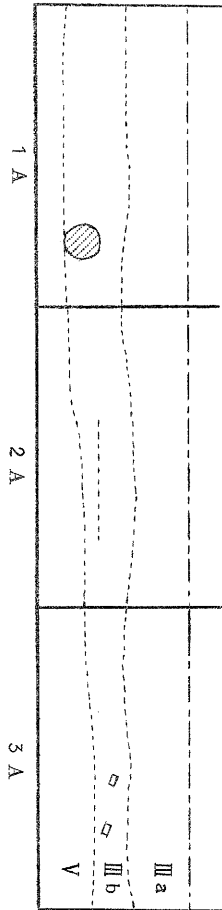
① 2南面(2と3の境界線より30cm北の断面)



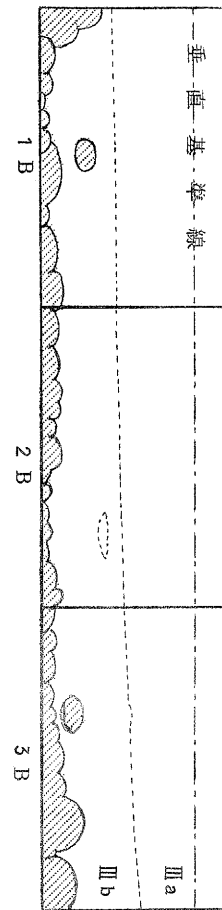
② W東端



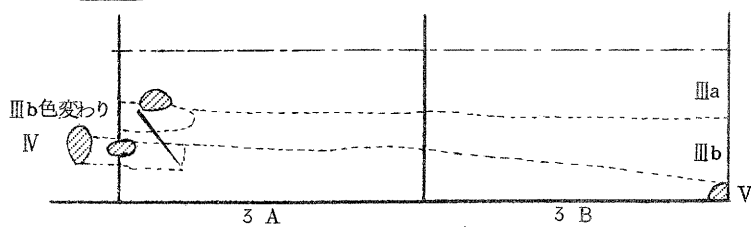
③ A東端



④ B東端



⑤ 3北面(2と3の境界線の断面)



土器の包含は認められない。

・Ⅲb層（下部）

細粒（砂）質で淘汰はよくない。土器片や木片を包含する。この層に部分的に淡色微粒質の薄層がはいり込んでいる部分があった。（第2図②，第3図③④⑤）

○第Ⅳ層：細礫まじりの砂層（第2図②③，第3図①②⑤）

厚さ8～12cm。調査域内では2A・3A・2W・3Wの区画のみに拡がり，第Ⅲ層や第Ⅴ層との関係は不整合的である。土器片や植物質遺物を集中的に多く包含し，遺構もこの層と関連している。この層は調査域よりさらに西方，南方に拡がっているものと推察される。

○第Ⅴ層：砂層及び礫層（第2図，第3図の各図）

第Ⅲ層から第Ⅴ層への移行には部分的につぎのような相違がみられる。

ア：Ⅲb層→Ⅳ層→Ⅴ砂層（第2図③，第3図①②⑤）

イ：Ⅲb層→Ⅴ砂層（第2図①③，第3図①③⑤）

ウ：Ⅲb層→Ⅴ礫層（第2図①③，第3図④）

第Ⅴ層の砂層は黄褐色で細粒質に淘汰され，部分的にヨシと思われる植物質の腐食したものが横走している。礫の部分はほとんどが巨礫で淘汰的である。第Ⅴ層には遺物・遺構の存在は認められなかった。

(2) 遺物の包含状況や遺構について

ア．土器片はⅢb層及びⅣ層に包含されている。特にⅣ層に集中的であった。垂直的には-43～-70（垂直基準線からの深さ・cm），水平的には2A・3A・2W・3Wに集中的で，他の区画ではごく僅かしか包含されていなかった。

イ．土器のうち器底に墨で四点印を付けたもの（第4図⑦）が9個，器の外側に文字を墨書したもの（第4図⑩，第5図④）が2個あった。それらは1個の例外（3AⅢb層に包含）を除いて他はⅣ層中に包含されていた。（第2図②中のP印）

3AⅢb層の四点印土器は-43に包含されていてこれは出土土器中最も浅い部類に属し，また3WⅣ層の-70（列石下）からも四点印土器の出土を見たが，これは最も深い部類に属する。四点印土器は同一時点での施印であると思われるので，この様な出土状況からこの遺跡は包含層の相違はあっても，年代的複合はしていないと考えられる。

ウ．調査域からは，かなり多数の須恵器片，土師器片が出土したが，完形品に近い



ものは、3AIV層から出土した須恵器の杯と、3WIV層から出土した須恵器の杯蓋(第4図⑩)の2個だけで、他は接合しても完形品として揃わない部分的破片であった。しかもつぎの例の様に1個の器の破片が相当の距離をもって散乱している状態であった。(第2図②ア～コ)

- |                       |                    |
|-----------------------|--------------------|
| ㉞ 高台杯 3A～3W(110cm 距る) | ㉟ 高台杯 3A～3W(90cm)  |
| ㉚ 双耳瓶 3A～藤田(70cm以上)   | ㉜ 土師かめ 3A          |
| ㉛ 土師碗 3A～3W(90cm)     | ㉝ 土師かめ 3A～2W(60cm) |
| ㉜ 土師碗 3A～藤田(60cm以上)   | ㉞ 土師かめ 1A～1B(80cm) |

エ. 2A・3Aの西方、IV層の東縁に沿って木杭列があった。(第2図②, 第3図①②⑤) 杭は立ったままの状態を確認されたものは6本であるが、発掘中に誤って抜きとられたらしいものが2本あり、他の木材片からの推察も含めると、この木杭列はさらに2Wの北方や3Aの南方に続いていたと思われる。(位置不明の木杭を2W①, 2W②とする)

各杭の先端はそれぞれIV層の下底部から僅かにV層に達し、杭は西方向に10°～50°傾き、杭2・3・5・6には東側から大礫が1個ずつ加圧的に当てられてあった。(第2図②, 第3図①②⑤)

杭2・5・6・2W②の4本は材木の辺部。1・3・4・2W①の4本は心部が使われており、それぞれ角状に縦割りした後、鋭利な金属具で先端を削断して作製している。先端の削断は、いずれも二方向からなされていて、1・2・5・6・2W②は左右均整的であるが、3・4・2W①は不均整な削りかたがされている。杭の長さは現存部は約35～45cmであるが、上端部が焼失、あるいは腐食によって欠損しているようにも思われる。杭1の上端部には縄かけのような凹みが見られる。(第8図①～⑧)(写真1)

各杭には、ある程度腐食したり炭化したりした植物根が二次的に付着している。

オ. 3WIV層には、杭列から40～50cm西に距って、数個の大礫からなる列石群が認められた。列石の上面部にも下面部にも土器片や木片の散乱が見られた。(第2図②, 第3図②⑤)(写真1)

カ. 3Aの南西部と1W東部のⅢb層には、焼石状に著しく風化した花崗片麻岩質の巨礫があった。(第2図②, 第3図②)

キ. 3A西部の杭列と3W東部の列石の間の部分には土器片の他に加工痕のある木片が多く散乱し(第2図②)、中には板状のもの(第8図⑬)や木釘状のもの

(第8図⑭⑮)も認められた。

ク。この辺りからは種子類(モモの果核3点, トチの種皮3点)も集中的に出土した。(第2図②, 第8図⑯~⑱)

ケ。2A南部からは木炭をはじめ焼痕のある木材片が多数出土した。(第2図②) また加工痕の顕著な木筒ともみられる木製品(第8図⑲)も出土した。(第3図①)(写真1)

コ。調査域内のⅢ層は東北方向に向かって厚くなる傾向があり, 1Bではおちこみのな変化が見られる。(第2図①, 第3図①~④) 1B~3Bの東部ではV層の砂層は消滅しているか, ごく薄く, Ⅲb層から直ちに礫層に変わる。この礫層は大礫以上に淘汰されており, Ⅲb層に接する上面には腐食炭化した植物根の付着が見られる。この礫層には土器などの遺物の包含は認められず, また1AなどのV層では砂層の下が同様の礫層になる(第2図①)ことから, 東部の礫層はV層の部分的な自然変化と見るべきであろう。

## 5. 出土品, 遺物

出土品は石および石製品, 土器片(須恵質, 土師質), 木片および木製品, 種子類に大別される。

### (1) 石および石製品

ア。Ⅲb層(1W東部, 2A・3A西部)やIV層(3W列石)に含まれている石は人為的な移動が推察されるので遺構に関係するが, いずれも加工痕は認められず, 自然石である。

イ。3WIV層(-68)から, 擦痕のある黒光沢平面をもった石製品が出土した。

(第8図⑩) 石質は石英斑岩で, 二片あるが同一製品の破片である。砥石(硯?)と思われる。(写真2)

### (2) 土器類

土器類は破片の状態でも多数出土したが, 須恵器質のものと土師器質のものがあり, それぞれは器形によってさらに細別される。なお土器の類別にあたっては藤田武信氏の収集品も含めて(そのつど註記)記載する。

#### ア. 須恵器類

第1類: 杯 (第4図①~③, 第7図⑥~⑩)(写真2)

・完形品に近い状態で出土したものは1個(3AIV層, 横転状態で), 接合により $\frac{4}{5}$ 以上復元できたものは数個にすぎず, ほとんどは半割以下の破片。

細片の状態出土した。

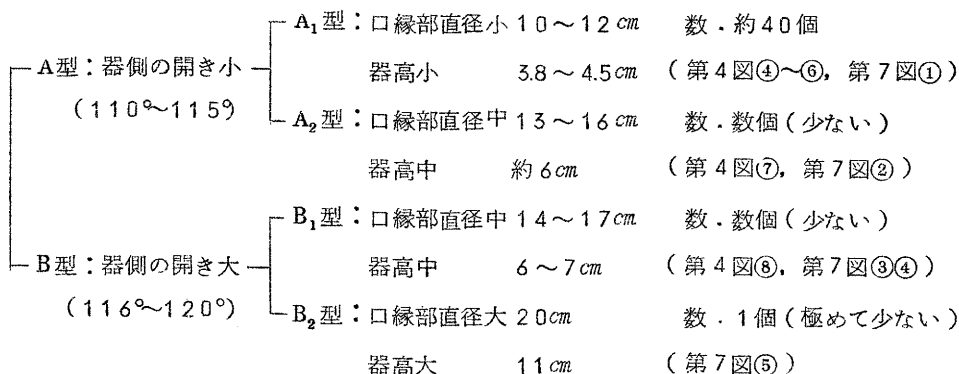
- 底部による推定個数は調査域から約 20 個、藤田収集品から約 30 個、計約 50 個である。
- 大きさは口縁部直径 11.5～12.5 (平均 12.1 cm)、外底部直径 6.8～8.3 (7.3) 高さ 2.8～3.5 (3.2)、側厚約 0.4、底部と側部の開き角  $124^{\circ}\sim 136^{\circ}$  ( $130^{\circ}$ ) で概して規格的である。
- 内面および外側部には微細な平行線(ろくろ目)が認められることや、指頭巾程度の微凹凸が 3～4 条横走していることから、成形にろくろが使用されたことが推察される。外底部に糸切痕のあるものは 1 個のみ(第 7 図⑥)で、多くは右廻転のろくろ上でへら削りの修正をしている。(第 7 図⑦⑧) 外底には一直線状の刻印(第 7 図⑦)や敷物痕(第 7 図⑧)の認められるものもある。
- 色は灰色を基調とし、青色がかった部分から黄褐色がかった部分までの変化が認められる。また硬さにも器によって多少の差異が感じられるが、これは焼成時の焔の状態や温度の差異によるものであろう。釉化した部分は認められない。
- 外底部に墨で 4 個の点印を施したもの(第 7 図⑥⑦)が調査域から 6 個、藤田収集品から 5 個、計 11 個認められた。また藤田収集品のなかには文字を墨書したものが 2 個認められた。(第 7 図⑨⑩)
- 陶土はかなりの粗粒を含んでいるところから、採土のままのものを使用し、水籤などの加工はしていないものと思われる。
- 器はかなり使用されたらしく、表面の粗粒部分が落剥したり磨耗したりしている。

第 2 類：台付杯および鉢(第 4 図④～⑧、第 7 図①～⑤、写真 2)

- 陶土や成形技法、焼成など基本的には第 1 類の杯と同様であるが、高台が付けられること、器の大きさに変化があること、側部の開き角が小さいことに相違点が認められる。
- 高台は器の成形完了後に着けられた いわゆるつけ高台であるが、内側からは鈍角的に、外側からは鋭角的になでて付着されているところに特徴がある。(第 4 図④～⑦、第 7 図①～⑤)
- 第 2 類もすべて破片状で出土したがその数は調査域から約 20 個、藤田収集

品から約30個，計約50個で第1類とはほぼ同数である。また第1類に見られたと同様の墨書四点印を外底部に施したものが調査域から2個，藤田収集品に4個，計6個あった。（第4図⑦）

- 第2類の土器は形や大きさから，さらにつぎのように細分されるが，このことから用途との関連も考慮すべきであろう。



- B型は焼成度が高く堅緻で，また自然釉がでているものがある。B<sub>2</sub>型のものには沈線が1本横走している。
- 第7図③のものは外底部の高台内に墨の磨痕があり硯の代用に使ったと思われる。また第7図①のものは口縁破損部から器の外側部にかけて油状のもの付着が見られ，燈器のような用途が推察される。

### 第3類：縁付杯？（第4図⑨，写真2）

- 3 WⅢb層から2個の小片が出土したが同一器の破片と思われる。
- 口縁から約2 cm下がったところに縁状の突出帯をつくり器を一周させていると思われる。突出部の先端部は欠損して不明。下半部も欠損しているし，また薄手(3 mm)ではあるが，器の概形は第2類のA<sub>1</sub>型に類するものと思われる。

### 第4類：杯蓋（第4図⑩~⑫，写真2）

- 3 WⅣ層の列石西側から仰位の状態で完形品が出土した。（第4図⑩）その他調査域から12個，藤田収集品から14個出ている。
- 陶土や焼成については杯と同様である。
- 上面部に糸切痕があること，肩部にへら削痕があること，つまみの上部が平らに近いこと，口縁の内反部が丸味を帯びていることがこの杯蓋の特徴である。

- 成形工程はつぎの様に推察される。①右廻転ろくろによる蓋身部の水引き成形→②糸切り切断→③つまみ取付け→右廻転ろくろ上で肩部をへら削りして仕上げる。
- 蓋の大きさは、口縁部内径で10.5～12cmのものが最も多く、13cm, 14.5cm, 16cmのものもある。これらは杯(台付杯)の大きさに応じた変異と考えられる。
- 杯蓋の中には、つまみのないものがある。第4図⑩のものは肩削りもしてなく、内面全体や外側上部にはウルシ様の固着物が認められるので、これは皿のような容器として使用したものと推察される。なお、この器の外側には文字の墨書があり、この文字も仰位にして読むべき書体と思われる。(第4図⑩)(写真2)

#### 第5類：双耳瓶(第4図⑬)

- 3AIV層と藤田収集品とから同一器の破片が出たものである。頸部は全く欠損。
- 肩部および胴部に数個の沈線が横走している。内外面ともに微細な平行線(ろくろ目)も見られる。
- 土が多少白色化する程の高火度で焼成されており、また灰釉を人工的に施したかと思われる様に釉がかかっている。破損前は相当の優品だったと思われる。

#### 第6類：横瓮? 提瓶?(第7図⑪)

- 藤田収集品にあったものである。
- 陶土や焼成は双耳瓶同様に釉がかかっている。平行条線が横走し、胴部にはたたき目痕がうすく残っている。丸底で内面底部は段状に凹みをつけて成形されている。
- 上半の器形は不明であるが横瓮・提瓶の類と推察される。

#### 第7類：壺類(第7図⑫～⑭)

- 第7図⑫は藤田収集品である。陶土や焼成は5類・6類に似ており、緑色の灰釉のかかった優品である。肩と頸の境が全く欠損しているのは資料としても惜しい。(第7図⑫)
- 第7図⑬は藤田収集品で外底は糸切りである。第4図⑭は2WIV層からの出土で高い高台が付いている。共に上部は不明であるが、一応ここに記載する。(第7図⑬, 第4図⑭)

第8類：甕 類（第7図⑭，写真2）

- 須恵質の甕の破片は調査域から10片，藤田収集品から20余片見られた。
- 甕の大きさは，頸部の直径30cm余り，胴部の直径40cm余り，厚さは1cm～1.2cmである。（第7図⑭，内外面ともに成形時につけられたたたき目，かき目が見られる。）
- 外側には灰釉がかかっている。

イ. 土師器類

第1類：椀（第5図①～④，第7図⑰，写真2）

- 軟質のため損壊が著しいが器底などから推察して調査域から10数個，藤田収集品に約10個見られた。
- 大きさは口縁部直径11.5～13cm，外底部直径6～4.5cm，器高3.5～4.5cm，厚さ0.4～0.6cmで規格的である。
- 成形はろくろ目の存在から，いずれもろくろ使用によってなされたと推察されるが，底部に糸切痕のあるもの（第5図①）と糸切痕がなくて敷物痕などの見られるもの（第7図③，第7図⑰）とがある。
- 2A IIIb層から出た椀の外側には墨書で文字が横書きしてあった。（第5図④）

第2類：台付鉢（椀？）（第5図⑤⑥）

- 高台部から推察して数個の存在が認められる。
- つけ高台で，大きさには変異がある。ろくろ成形である。

第3類：煮沸用鍋？（第5図⑩）

- 下部が欠損しているので不明であるが，第2類より大型であることや器の内面が著しく炭化していることから煮沸鍋と推察した。

第4類：甕（第6図①～⑫，第7図⑳）

- 口縁部片が調査域に5種，藤田収集品に6種見られた。
- 口縁部直径は約20cmのもの4点，25cmのもの2点，35cmのもの2点，40cmのもの3点で大きさが多様であることを示している。
- 外反した口縁部の外側上端に沈線を一本，それより少々低めの内側にもう一本の沈線を対象的に横走させるのが特徴である。
- 口縁部にはろくろ目が見られるが，胴部のものと見られる破片の外面にはかき目，内面にはたたき目状の痕が見られ，外面下部はへら削りされるようで

ある。(第6図⑦～⑩)

- 第6図⑪, ⑫のような底部が出土しているが, この類のものであるか否かは不明である。⑪は側部にろくろ目, 底部に粗い糸切痕がある。

#### 第5類: 小型甕(第6図⑬, ⑭)

- 数個分の破片を見ているが, 第4類と比べて小型・薄手である。また内外面とも炭化したり, 煤状物の付着していることが多い。
- 内面および外側上部にはろくろ目が見られ, 外側下部および外底部はへら削りによって薄く成形されている。これは熱伝導をよくするためのくふうと推察されるので煮沸器の特徴と見られる。

#### 第6類: 異型甕?(第6図⑥)

- 1A・1B IIIb層からの出土片を接合したもので, 輪積み状になっている。
- 外側部には朱塗りの痕跡が認められる。

#### 第7類: 高杯(第7図⑱, ⑲, 第5図⑦～⑨)

- 藤田収集品のなかに高杯の脚部と思われるものが3個見られた。
- 朱塗りの痕跡がある。(第7図⑱⑲)
- この脚部は様式的には時代がさかのぼる(弥生式?)ことも推定されるものである。
- なお1Aおよび1BのIIIb層からそれぞれ出土したものの中に浅型で朱塗り痕のあるものが3点あるがこれは高杯片といえるか否かは不明であるが, ここに記載する。(5図⑦～⑨)

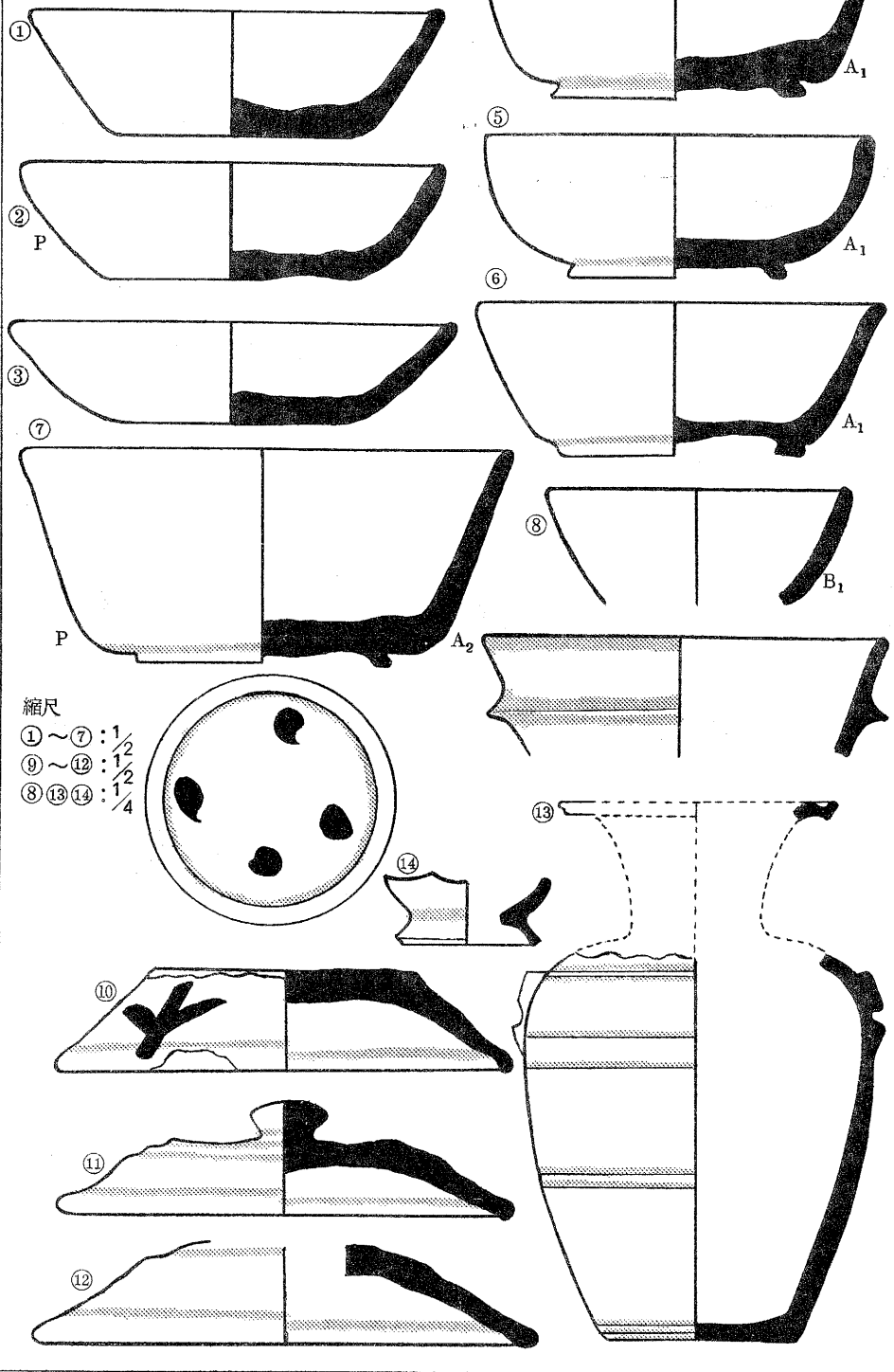
#### (3) 木片および木製品(第8図①～⑮, 写真1)

- 調査域からは50余の木片が出土した。いずれもIIIb層およびIV層からである。
- その多くに鋭利な金属器によると思われる切断痕が認められた。加工痕のない木片は8点のみである。特に木製品的に加工されたものは10数点あった。
- 木片の中で8点には焼痕が認められ, また木炭片が2点出土した。
- 木片類の出土状況についてはp.282のエ.キ. p.283のケの項に記載した。
- 木片類のうち3AIV層(-65)からの出土品数点をC<sub>14</sub>による年代測定の資料として4月23日学習院大学の木越研究室へ提出した。

#### (4) 種子類(第8図⑯～⑳, 写真1)

- 調査域からは既述の6点の種子類が出土した。(p.283(2)7)

第4図 出土須恵器類 (縮尺 $\frac{1}{2}$ ,  $\frac{1}{4}$ )

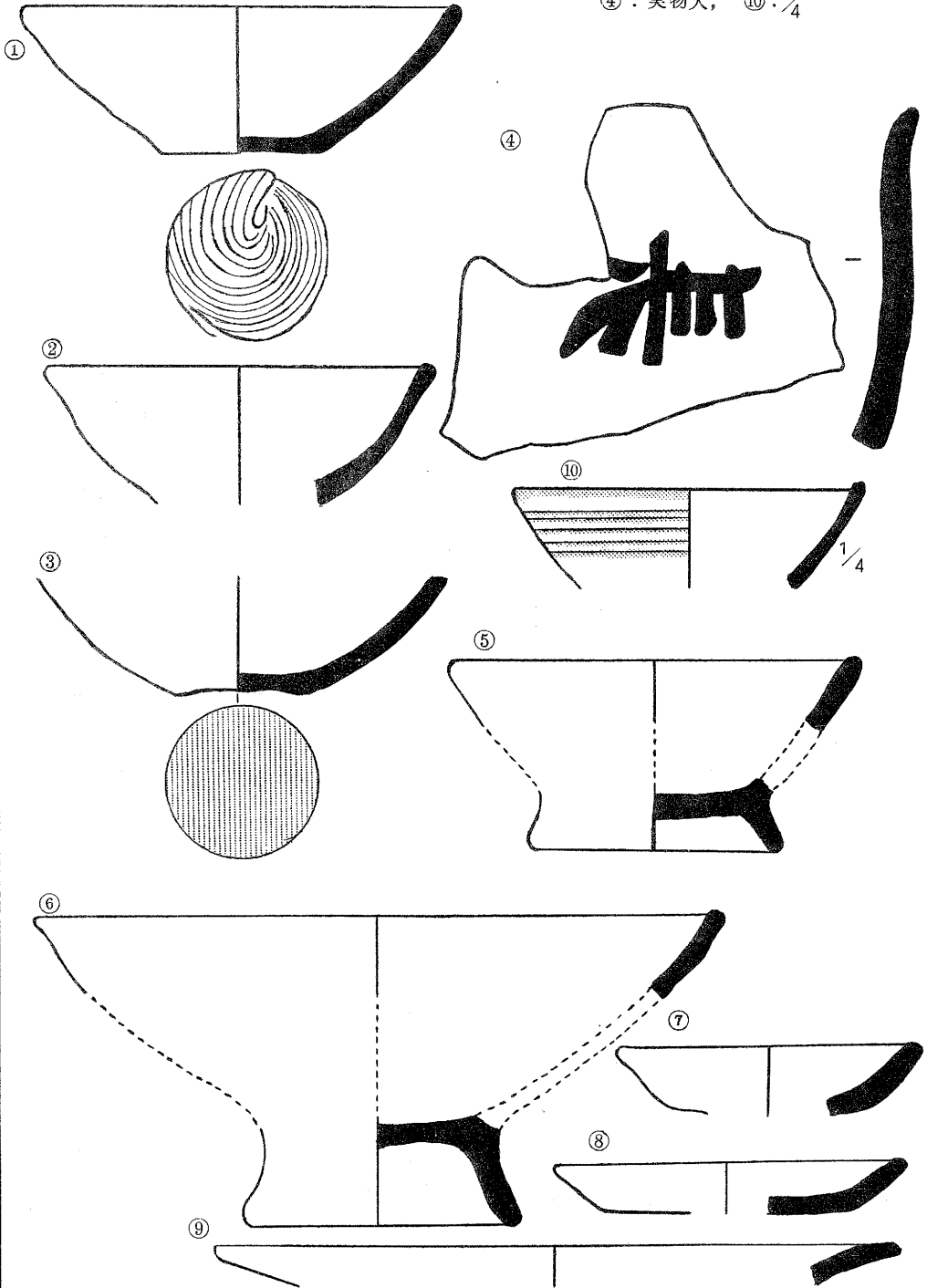


縮尺  
 ①~⑦ :  $\frac{1}{2}$   
 ⑨~⑫ :  $\frac{1}{2}$   
 ⑧⑬⑭ :  $\frac{1}{4}$

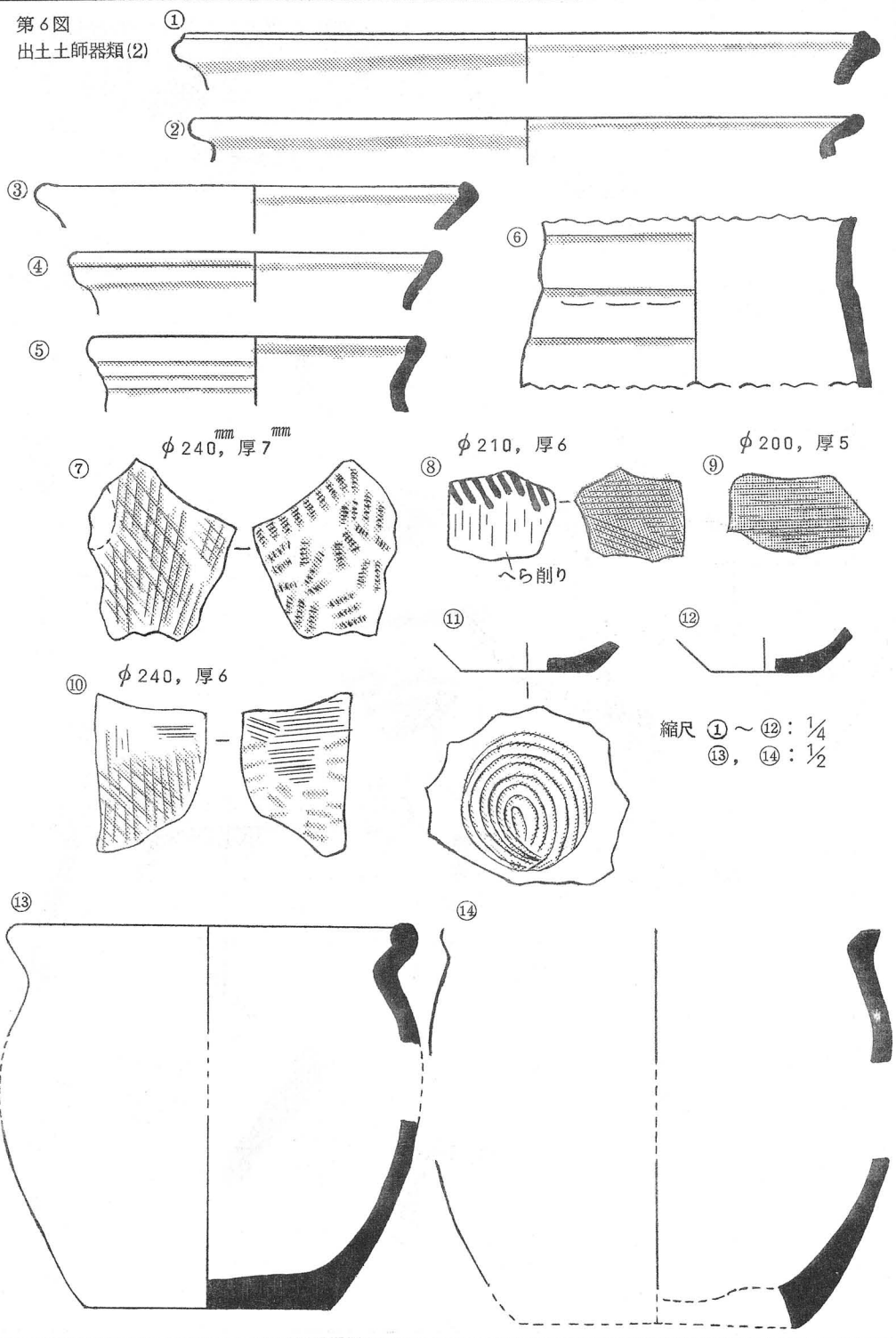


第5図 出土土師器類(1)

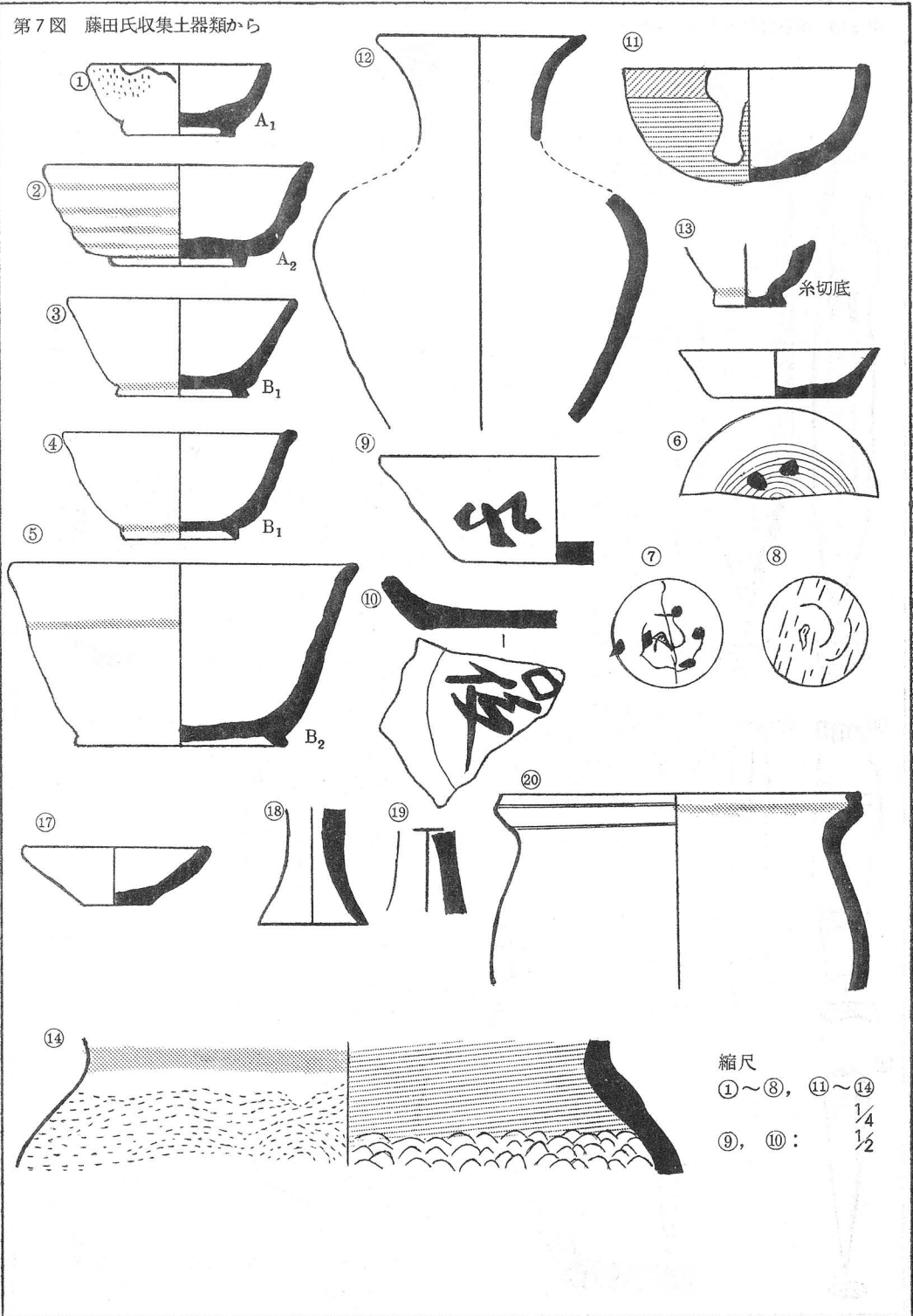
縮尺①~③, ⑤~⑨:  $\frac{1}{2}$   
④: 実物大, ⑩:  $\frac{1}{4}$



第6図  
出土土師器類(2)



第7図 藤田氏収集土器類から



第8図 植物質の出土品、及石器

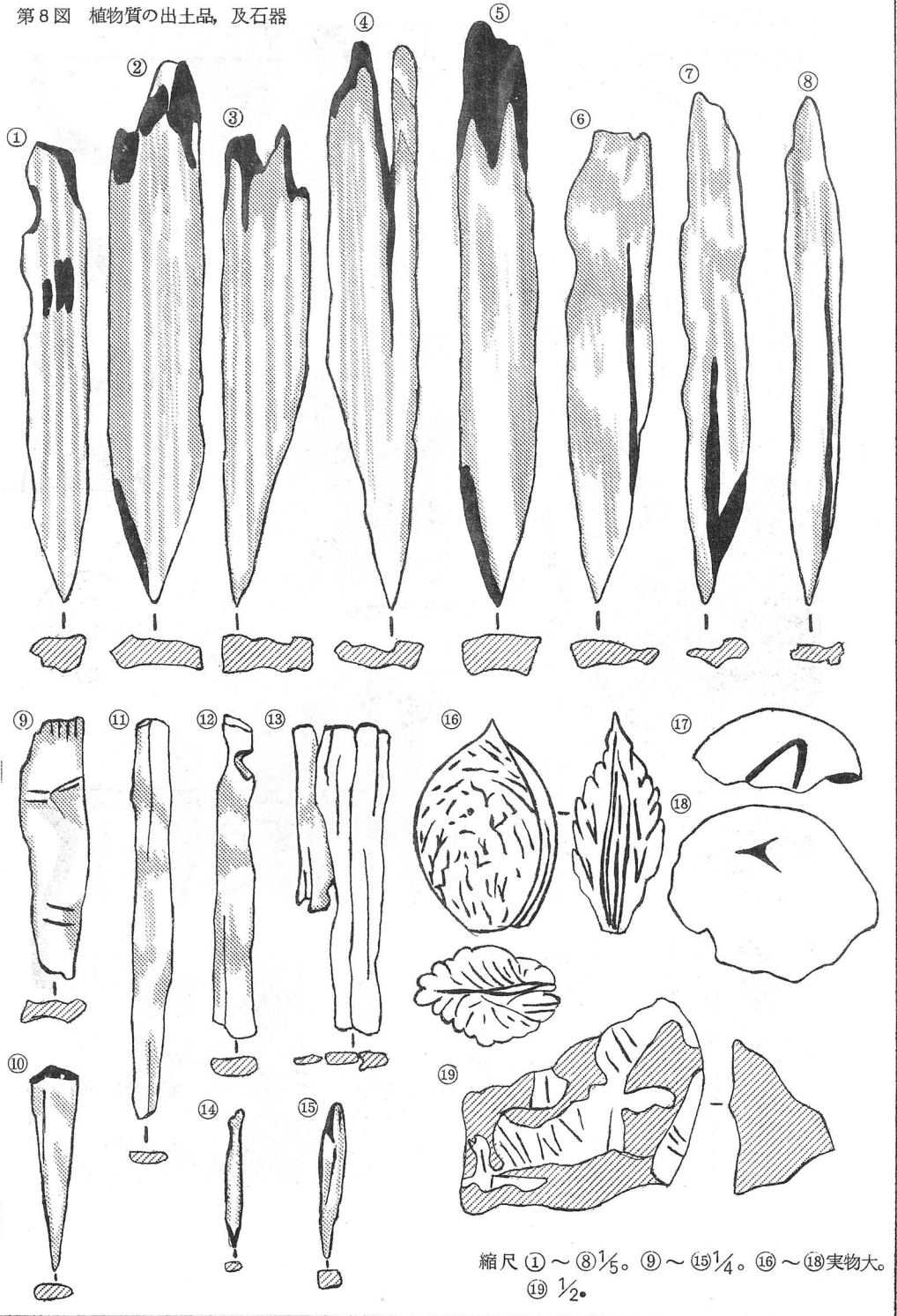
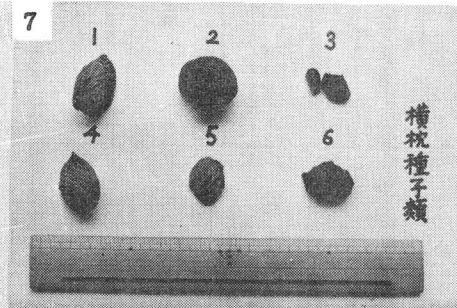
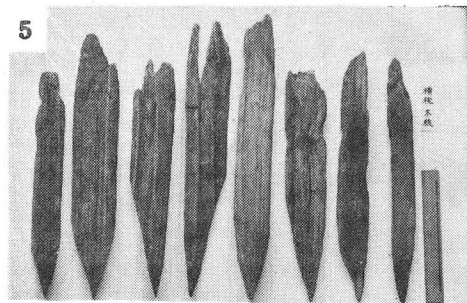
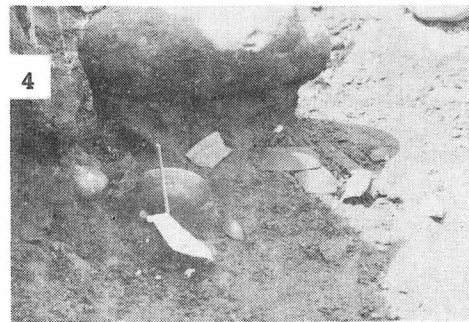
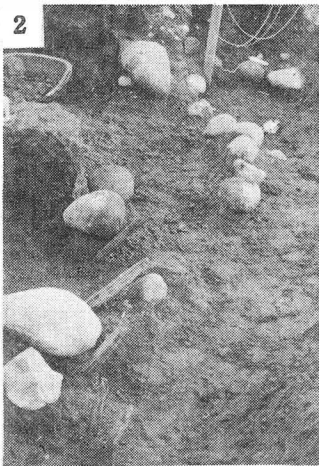
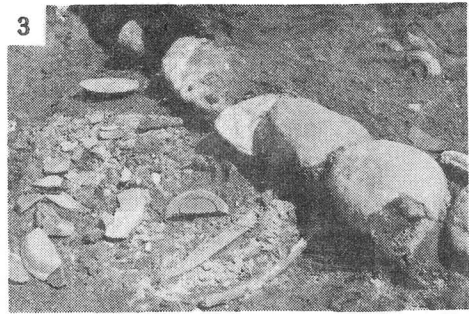
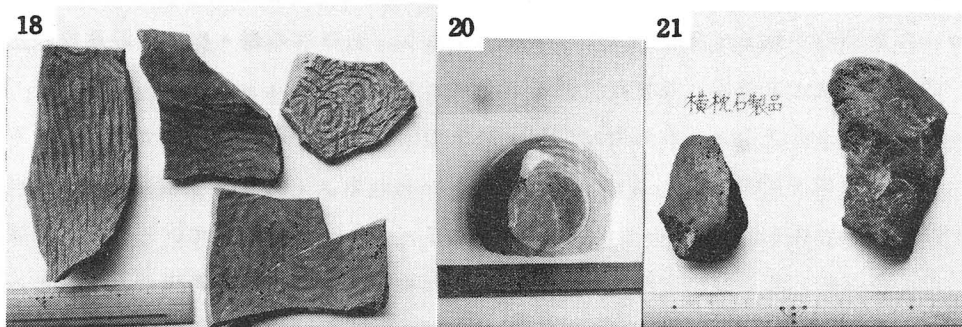
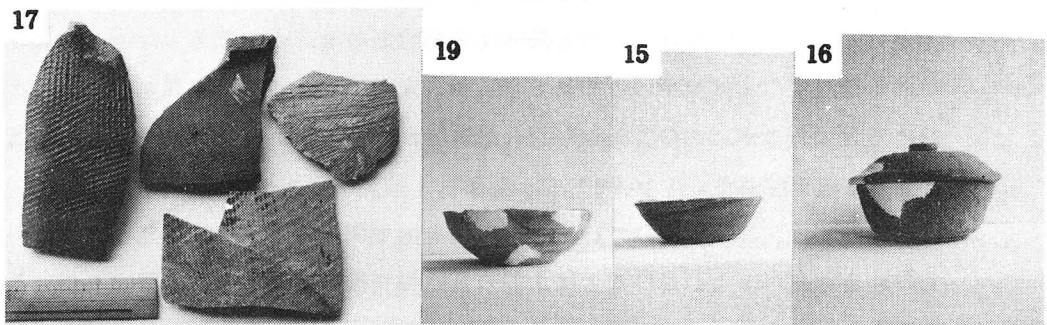
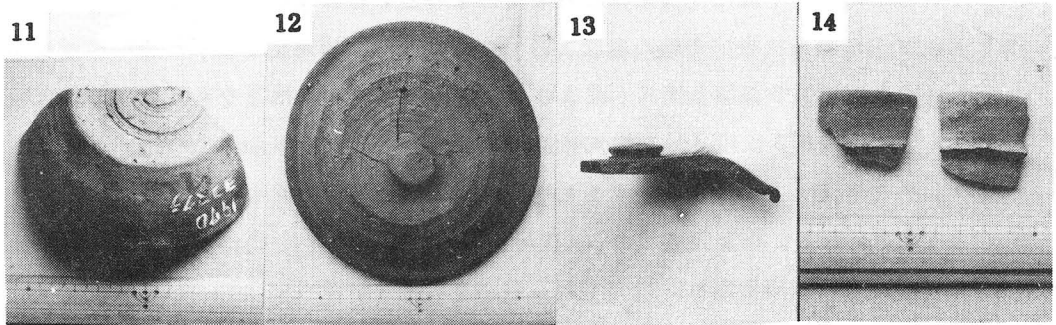
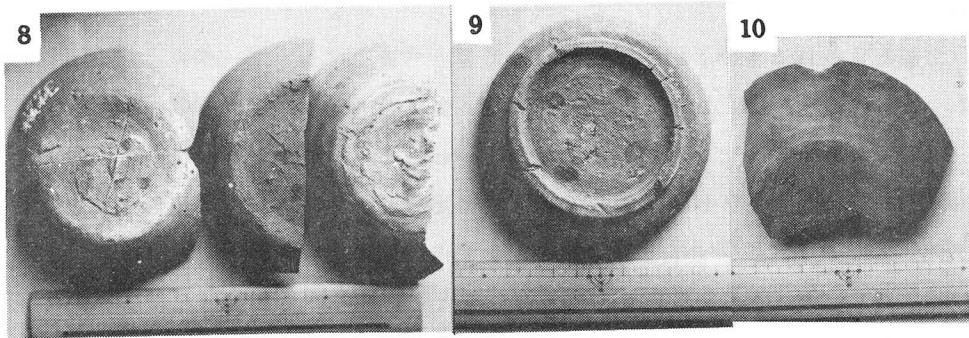


写真 (1)



- ① 調査域西半分  
 ② 2Wから3Wを望む  
 ③ 3W・3Aの遺物出土状況  
 ④ 3A南西部の状況  
 ⑤ 木杭。左より1. 2. 3. 4. 5. 6. 2W1. 2W2  
 ⑥ 木片類  
 ⑦ 種子類

写真 (2)



- ⑧ 須恵器杯の底部（製作状況と四点印）      ⑨ 高台杯底部  
 ⑩、⑪ 黒書文字のある須恵器片      ⑫、⑬ 須恵器杯蓋      ⑭ 縁付杯  
 ⑮ 須恵器杯の側部      ⑯ 須恵器高台杯及び蓋      ⑰ 須恵器甕片外面  
 ⑱ 同内面      ⑲ 土師器碗の側部      ⑳ 同底部      ㉑ 石製品

## 6. 考 察

### (1) 土器に見られる特徴、年代などについて

ア. この遺跡から出土した須恵器・土師器いずれもほとんどのものにろくろ成形の痕跡がある。また9世紀以降の技法といわれる(註3.4.5)糸切りが土師碗や須恵杯蓋などに見られる。奈良時代後期に出現し、北陸個有の形態をもつといわれる(註4)双耳瓶や、平安時代中期まで作られたといわれる(註4)横瓮?が出土している。須恵甕の内面には青海波文といわれる同心円状のたたき目が見られるが、この手法は9世紀末ごろまでのものといわれる。(註3)

イ. 以上の諸特徴や出土品の器種・器形の特徴の総合的な比較によって、横枕遺跡は東海地方の3段階8窯式(註3)の第2段階に、北陸地方の4段階8様式編年(註4)の第3段階6~7様式に位置づくものと思われる。

ウ. 絶対年代は上記様式に準ずると平安時代中期・9世紀後半~10世紀前半ということになる。なお調査域の3AIV層から出土した木片のC<sub>14</sub>による年代測定を学習院大木越研究室に依頼してあるが、まだ返答を得ていない。

エ. 土師質碗には糸切底のものとそうでないものの二種がある。須恵質杯についても糸切底で器形も幾分他のものと異って浅型大底のものが1個あった。このような同器種内での変異を年代の相異と見るか、産地(製作者)の相異によると見るかは不明であるが、このことから複合遺跡とはいえないことは前述の四点印のことからも明白である。(p.281(2)イ)

オ. 須恵器では双耳瓶その他で、杯とは釉の有無や陶土の色・焼成度などに差異が見られるものがある。このことは土器の供給源が複数であることを示唆していると考えられる。

カ. 須恵器の杯類・土師器の碗類は供膳器であり、須恵器の壺・甕類は貯蔵器、土師器の甕類は煮沸器、高杯は供献器と見られる。

キ. 土師器が供膳器にされるのは信州・東北ではむしろ普遍的なことであるが、石川県では第4段階にはいつてからの傾向といわれる。(註4)横枕遺跡の供膳器が須恵質杯50、台付杯50、土師質碗25といった出方をしているのは、地域的、年代的、あるいは遺構の性格のいずれの特質によるものか興味のあるところである。

### (2) 遺構について

ア. 出土土器(藤田収集品を含む)で器底に4個の点印を墨書したものが18個も

あった。また文字を墨書したものが4個、器底高台部を硯代用したものが1個あった。当時、文字及び墨を使う者が、この遺跡形成者の中にいたと考えられるわけで、当時の文化状況からして寺院なり官公衙なりが近辺に存在したことが推察される。

イ. 土器の総数は200個に近いものになるが、第IV層を中心とした狭い範囲に集中的に、しかも完形品が極めて少なく、それぞれの破片も当初から距って散乱した状態であるが、これは投棄によるものか、何らかの風習によるものか、自然的災害によるものか不明である。

ウ. 砂層（IV層）、杭列、列石、焼石列、木簡状、板状、木釘状などの木製品、木炭、焼木片などは何らかの人為的な結果もたらされたものであるが、現段階では意味づけは不可能である。

エ. モモヤトチなどの種子類も人為的に投棄あるいは供献されたものなのか、自然的にそこに存在したのか不明である。

オ. 以上の状況から、この遺構の性格について、あえて推論を試みると、人工的な流路（溝）の跡、あるいは不用物の投棄所の如きものと想定したい。いずれにしても当時の地方としては相当文化度の高い居住地遺構が近辺に存在することは確かである。

カ. 遺構は調査域の南方に続いている。また調査域の東側の水田のごく一部を試掘したところ（3Bの東南方約3mの地点）、約30cmの表土層（新第II層）の下に黒ボク層があり、それを約55cm掘った地点（調査域の垂直基準線から-70になる）から土師器片の出土を見た。

キ. この遺跡は黒ボク土を主体とした約1mの表土に覆われているわけで、僅か1000年間にこのように厚い被覆が生じたことにも興味が感じられる。

### (3) 関連に考慮を要する歴史的記録について

ア. 東大寺領大荆村の墾田地を寺田近辺に比定する（註2）と、当時その地図（註7）に記載されている「従郡川枯往道」の道がこの遺跡の近くを通過していたことが推定され、また「川枯」という郷あるいは新川郡衙がこの遺跡の近辺に存在したことになる。なお大荆村墾田地図は神護景雲元年（767年）作製である。

イ. 「倭名類聚抄」に記載されている新川郡十郷には「川枯」という郷が含まれているが、同別本（高山寺本）では川枯郷が亡となっている。（註8）このことによって平安時代のある時期に「川枯郷」に何かが原因で大きな変動があったこ



とが推察される。

ウ. 地震の記録 (註 9)

- 863. 7. 10 (貞観 5) 越中越後山崩れ民家倒潰す死者多し (三代実録)
- 887. 8. 26 (仁和 3) 信濃大地震山崩れ河塞ぎ後溢流して北部被害流死多し (日本紀略)

○ 参 考 文 献 (註記)

1. 常願寺川沿革誌 建設省富山工事事務所 1962
2. 東大寺領新川郡大藪庄と文部庄 石原与作 富山県地学地理学研究論集 第5集 1971
3. 世界考古学大系 4 平凡社 昭 37 (土器の発達, 須恵器; 樽崎彰一)
4. 日本の考古学 VI 河出書房 昭 42 (窯業, 北陸; 吉岡康暢他)
5. 吉岡康暢氏より
6. 富山県史 資料編 I 古代; 富山県 昭 45
7. 石原与作氏より
8. 理科年表 東京天文台 丸善 昭 46

○ 追 記

① 調査活動には次の諸氏が参加した。

岡崎 卯一	佐伯 延一	浅井勝二郎	坂井 市郎	清水数次郎
山林 重作	尾井 清政	松岡 宗次	石原 与作	女川米次郎
水上 工	舟橋 幸甚	佐伯 立光	上谷 宗芳	安田 良栄
三鍋 久雄	松永 信行	佐伯 令磨	高島 正	松岡 智志

② なお次の諸機関・諸氏の協力・援助に与るところが大であったことを記して謝意を表する。

土地所有者 酒井 清正, 深川 義信	立山西部土地改良区常務理事 石田 忠則
工事担当理事 西野 源三郎	相川工業KK社長 相川 仙吉
利田公民館長 船木 正則	藤田 武信, 以下地区有志
利田小学校長 真田 行雄, 有志児童	

③ 調査に当たっては, 県考古学会 岡崎卯一氏, 石川県資料館 吉岡康暢氏, 県史編さん室 京田良志氏より指導助言をうける機会があったことを記し謝意を表する。

④ この遺跡の発見と調査前の遺物の収集は藤田武信氏に与るところが大きい。またその資料を快く提供して下さったことに敬意と謝意を表する。

⑤ 遺物の整理や記録, 報告書の作製は主として安田良栄が担当した。当遺跡からの出土品は立山町史編さん室で保管されている。

